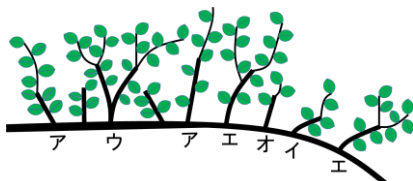
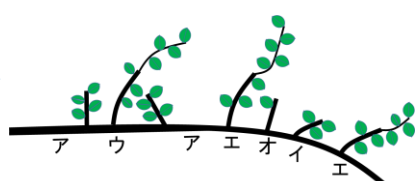


4 果 樹

項 目	作 業 内 容
(1) かんきつ類の仕上げ摘果・樹上選果 (2) 極早生、早生うんしゅうみかんの収穫	(今月の作業のポイント) ○かんきつ類の仕上げ摘果・樹上選果 ○極早生、早生うんしゅうみかんの収穫 ○かんきつ類の夏秋梢管理 ○極早生・早生うんしゅうみかんの秋肥施用 ○かき、キウイフルーツの収穫 うんしゅうみかんにおいては、仕上げの時期を迎えるため適期管理を行い、夏秋梢管理や施肥管理など、次年度に向けた作業も進めていく。 ア うんしゅうみかん 樹上選果で商品性が劣る果実を除去する。中晩生で後期重点摘果を行っている園では、10月中旬をタイムリミットとし、果皮表面が滑らかになり光沢を持つようになってからの仕上げ摘果を心がける。仕上げ摘果では、上向きの大玉果や小玉果、日焼け果や傷果などを除去する。 イ 中晩柑類 これまでの摘果で見落とした直花果、日焼け果、腰高果、果梗枝の太い極大果、極小果、傷果などを除く。着果が多い樹では適切な葉果比になるよう着果量の調整を行う。なお、「甘平」では裂果した果実が腐敗し、隣接果の腐敗を誘発するため、裂果した果実は結果枝の基部から除去する。 園地ごとに定期的な果実分析を行い、着色や糖度、クエン酸のチェックを行い、分割採収による品質の均一化を図る。収穫の際は、果実にハサミ傷をつけないように注意するとともに、果実の取り扱いを丁寧に行うなどして腐敗果の発生を減らす。  写真1 収穫期のうんしゅうみかん

目	作業内容																									
(3) かんきつ類 の夏秋梢管理	夏秋梢は樹勢の強い樹や着果の少ない樹に多く見られ、放置すると同化養分が夏秋梢の伸長に使われ、果実肥大の抑制や品質低下、耐寒性の低下が懸念される。園や樹の着果状況、夏秋梢の発生状況を見ながら、平均気温が 20℃以下となり秋芽の発生が少なくなる 10 月中旬以降を目安に以下の管理を実施する。 ア 夏秋梢の強い立ち枝、樹冠内返り枝は基部から除去する。 イ 角度が 45 度以内の夏秋梢は、夏と秋の境のコブの上で切り返し、春枝を発生させる。 ウ 柔らかい樹作りのため、日照条件を考慮して、夏秋梢は 50～60%程度残す。 エ 春枝から夏秋梢が多く発生している場合は、1 本だけ残し、残りは除去する。 オ 弱い夏秋梢はコブの下まで切り返し、充実した春枝を発生させる。 処理前  処理後  図 1 かんきつ類の夏秋梢管理																									
(4) 極早生・早生 うんしゅうみかんの秋肥施用	果実生産で消耗した養分を補給し、樹勢回復や耐寒性向上、翌年の花芽分化を促すため、収穫期の前後で秋肥を施用する。秋肥は施用時期が遅くなると、地上部器官への移行が遅れるが、地下部器官へは吸収され、翌春の新梢・花蕾の形成に寄与することから、適期を逃した場合は即効性の化成肥料等を施用する。 極早生うんしゅうみかんは、収穫直前の 10 月上旬（10 月中旬までに大部分収穫することを前提）と収穫後の 11 月上旬に分施して樹勢回復を図る。早生うんしゅうみかんでは果実の収穫を 11 月中旬までに終えるものとして、収穫最盛期の約 3 週間前に施用する。また、収穫後、窒素成分主体の液肥の葉面散布を数回行い、早期の樹勢回復を図る。 表1 極早生・早生うんしゅうみかんの秋肥・晩秋肥施肥基準（愛媛県施肥基準） <table><tr><th rowspan="2">品種名</th><th rowspan="2">目標収量 (t/10a)</th><th rowspan="2">施肥 時期</th><th colspan="3">施肥分量 (kg/10a)</th></tr><tr><th>窒素</th><th>リン酸</th><th>カリ</th></tr><tr><td rowspan="2">極早生うんしゅうみかん</td><td rowspan="2">4</td><td>10 月上</td><td>8</td><td>6</td><td>6</td></tr><tr><td>11 月上</td><td>5</td><td>3</td><td>3</td></tr><tr><td>早生うんしゅうみかん</td><td>4</td><td>10 月下</td><td>11</td><td>7</td><td>7</td></tr></table>	品種名	目標収量 (t/10a)	施肥 時期	施肥分量 (kg/10a)			窒素	リン酸	カリ	極早生うんしゅうみかん	4	10 月上	8	6	6	11 月上	5	3	3	早生うんしゅうみかん	4	10 月下	11	7	7
品種名	目標収量 (t/10a)				施肥 時期	施肥分量 (kg/10a)																				
		窒素	リン酸	カリ																						
極早生うんしゅうみかん	4	10 月上	8	6	6																					
		11 月上	5	3	3																					
早生うんしゅうみかん	4	10 月下	11	7	7																					

項 目	作 業 内 容
(5) かき、キウイフルーツの収穫	ア かきの収穫 かきの果実は、完熟に至るまで肥大と着色、成熟が進むことから、早採りを避け十分に着色した適熟果を収穫するよう心がける。また、収穫時に果皮に傷をつけないように注意する。さらに、濡れた果実を収穫すると汚損果の原因となることから、乾いた状態の果実を収穫する。 果実の着色を促進する方法として、反射マルチの設置が有効であり、樹冠下に反射マルチを敷くことで、秀品率の向上や汚損果の発生防止にもつながる。また、マルチの効果を高めるためには新梢管理を徹底し、樹冠内部の日照条件を改善することが重要である。  写真2 収穫期のかき イ キウイフルーツの収穫 果実の糖度は、これまでのデンプン蓄積量と収穫1～2か月前の樹体への水分ストレスによって左右されるため、10月のはかん水を控え、乾燥ぎみに管理する。ただし、落葉させると逆効果になるため、樹の様子を十分観察しながら対応する。  写真3 収穫期のキウイフルーツ 収穫期の目安としては、未追熟果の糖度が6.5以上になってから収穫を開始する。なお、貯蔵中の腐敗果の発生を防止するため、収穫前に貯蔵病害対象の薬剤散布を、果実全体に十分かかるように必ず行う。

(作成 果樹研究センター)